

論文内容要旨

論文題目

特定健康診断受診者における血清コリンエステラーゼ値と生命予後および
食生活習慣・食事内容との関連: Takahata Study と Yamagata Study より

教育・研究領域：生涯生活支援看護学

氏 名：三 枝 真

【内容要旨】

本研究の目的は、血清コリンエステラーゼ (ChE) 値が地域住民の全死因死亡の独立予測因子となるか、ChE 値に関連する食生活習慣・食事内容は何かを明らかにすることである。

分析は Takahata Study と Yamagata Study のデータを用いた。対象者数は各々高島町民 3,504 人、山形県民 15,657 人である。

Takahata Study にて、血清アルブミン (Alb) 値と ChE 値は単変量相関解析により正の相関を示した。対象者は Alb 値と ChE 値に基づき 3 群 (低値群、中間値群、高値群) に分類した。ChE 低値群は Kaplan-Meyer の生存曲線と Cox 比例ハザードモデルにより中間値群よりも全死因死亡率や全死因死亡のハザード比が有意に高かった。ChE 値は地域住民の全死因死亡の独立予測因子であると明らかになった。この結果は Yamagata Study で同様に分析しても再現性を認めた。Yamagata Study にて、ChE 値が低下しない食生活習慣・食事内容はロジスティック回帰モデルにより、「甘味を控える」「月 1-3 回以上夕食にそばを食べる」「週 3-4 回以上果物 (みかん以外) を食べる」「週 3-4 杯以上緑茶を飲む」であった。


山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名：三枝 真

論文題目：特定健康診断受診者における血清コリンエステラーゼ値と生命予後および食生活習慣・食事内容との関連：Takahata Study と Yamagata Study より

審査委員：主審査委員 櫻田 香 

副審査委員 齋藤 貴史 

副審査委員 松田 友美 

審査終了日：令和 4年 1月 17 日

【 論文審査結果要旨 】

低栄養は予後不良因子であることについてこれまで幾つかの報告がなされているが、それらの報告は血清アルブミン (Alb) 値によって栄養評価が行われているものがほとんどである。本研究では栄養の指標として血清コリンエステラーゼ (ChE) 値に着目し、1) 一般住民の ChE 値と生命予後との関連を明らかにすること、2) ChE 値に関連する食生活習慣・食事内容を明らかにする目的で検討が行われた。対象は、Takahata Study 3504 人と Yamagata Study 15657 人の 2 つのコホートである。まず Takahata Study において、Alb 値と ChE 値の相関を検討し、正の相関(相関係数 0.30, $p < 0.01$)が認められることを明らかにした。その後、Alb 値と ChE 値を各々低値群、中間値群、高値群の 3 群にわけ、 Kaplan-Meier 法と Cox 比例ハザードモデルにて生存との関連を検討した。その結果、未調整モデルでは Alb 低値群と ChE 低値群は中間値群に比べて有意に死亡リスクが高いことが示された。多因子調整モデルでは、ChE 低値群のみ中間値群と比較し有意に生命予後が不良(HR1.30、95% CI:1.06-1.59、 $p < 0.05$)であることが明らかになった。次に、Yamagata Study においても同様に ChE 値と生命予後との関連を検討した結果、ChE 低値群は中間値群と比較し有意に生命予後不良(HR1.44、95% CI:1.13-1.84、 $p < 0.01$)であることが明らかとなった。最後に、ChE 値と食生活習慣・食事内容の関連を検討した結果、「月 1-3 回以上夕食にそばを食べる」「週 3-4 回異常果物 (みかん以外) を食べる」「週 3-4 杯以上緑茶を飲む」が ChE 値を低下させない食生活習慣であることが示された。本研究結果は、看護職が地域住民に栄養指導を行うことの重要性を科学的な根拠に基づき支持するものである。

論文および口頭発表に基づき審査した結果、本研究は看護学に大きく貢献できる新知見を含み、看護学の質の高い実践に極めて有意義なものであることから、学位論文 (博士) として相応しいものと評価した。